

Glocal Tenri



4

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.4 April 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

・巻頭言

信仰とおぢばがえり

／永尾 教昭 1

・ライシテと天理教のフランス布教 (28)

戦争に対する宗教の立場についての私見

／藤原 理人 2

・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (34)

天理教教義翻訳の諸相①

／成田 道広 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (7)

楽名は政治を左右するか?

／中 純子 4

・ヴァチカン便り (55)

現法王・前法王の動静

／山口 英雄 5

・思案・試案・私案

「碍」の字表記問題再考 (18)

仏教にみる障害者像

／八木 三郎 6

・2021 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ (7)

第6講：115「おたすけを一条に」

／澤井 義次 7

・おやさと研究所ニュース 8

2021 年度宗教研究会／2022 年度公開
教学講座のご案内／2021 年度「教学
と現代」／2021 年度公開教学講座

巻頭言

信仰とおぢばがえり

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

天理教の海外布教にとって、大きな目標は「海外布教」から「布教」に転換させることであろう。つまり、「海外布教」は日本人が海外で布教することを前提とした言葉である。筆者は日本人なので、例えば筆者が布教する宗教はヨーロッパ人にとって「日本の宗教」だ。彼らが純粋に教理を探求しようとする面前に、日本という薄い霧がかかってしまう。そうではなくフランス人がフランスで、タイ人がタイで布教をすることはただの「布教」である。

すでに述べてきたように、日本との繋がりがことさら目立つことは必ずしも海外での布教に有益とは言えないと思う。ブラジルなどのように特に天理教にその傾向が顕著だと思われるのは、信仰の中心地である「ぢば」との関連があるからだろう。筆者も、教理に耳を傾ける人が出れば、まずぢばへの帰参を勧めた。しかし「始めにおぢばがえりありき」で、信仰を「ぢばへの帰参という事実」に委ねてしまうのではなく、本来はそれぞれの地で教理を十分に習得してもらい、それから帰参となるべきだろう。あくまでもぢば帰参は信仰の究極的な（ここで言う「究極的」とは必ずしも時間的な意味ではない。もちろん信仰的成人の途上でもよい）目標であるべきだろう。

実際、日本国内においても交通手段が今のように発達していない時代、遠隔地では多くの人はずばに帰ることは叶わなかったが、天理教の信仰は伸びていった。

一つの例として、ぢばから遠い北海道を見てみよう。天理教はすでに明治20年頃には同地に伸びており、明治26年北海道初の教会として現雨龍大教会が設立された。会長となったのは西垣定喜である。西垣は、もともと奈良県十津川村に住んでいたが、明治22年の十津川大水害を受けて、県の北海道移民事業に応募し移住する。そして北海道新十津川村と命名され

る地で布教に励む。しかし、その時点では西垣は、奈良県に住んでいたにもかかわらず、まだぢばを知らなかったのである。

新十津川村で信仰は徐々に広がり、明治25年2月、所属である南海分教会（当時）から役員が巡教に来た際には50人余りの信者が集っている。もちろん一人としてぢばに帰った者はいない。ようやく同年12月教祖の墓地改葬式に参列するため、代表として4人の信者が帰参することができた。しかし西垣はそこには入っていない。翌26年10月新十津川布教事務取扱所（現雨龍大教会）が設立されるが、驚くことにその時点でもまだ西垣は帰参していないのである。彼が帰参したのはようやく同年12月で、さづけの理を拝戴しようぼくになったのは翌27年1月である。このように、当然のことながら、当時ぢばに帰参することは、今いわばアフリカ・コンゴの地から帰るようなもので、金銭的にも時間的にも難業であったのだ。

雨龍の例は特別ではないだろう。しかし、天理教は日本各地に伸びていった。それは、それぞれの地で信仰が根付いていったからだ。ぢばへの帰参は、信仰生活における遠い目標だった。

海外布教とは、このプロセスを海外の地で再現させることではないか。つまり、全国各地で教理の習得ができる体制を整え、入信から布教ができるまで信仰的成人ができるようにする。さらに、その地での入信者が自分たちで信仰的な共同体を組織し信仰を磨きあうようになる。こうして各地で天理教の信仰が言わば安定化していく。そして、人生のどこかでぢばへ帰参し、さづけの理を拝戴するという形になっていくべきではないだろうか。

【参考文献】

天理教雨龍大教会史料集成部編『天理教雨龍大教会史 第一巻』天理教雨龍大教会、1983年。